われはフランソワ

山之口洋

新潮社

われはフランソワ

山之口 洋

新潮社

われはフランソワ

著　者……山之口洋（やまのぐちよう）
発　行……2001年2月20日

発行者……佐藤隆信
発行所……株式会社新潮社
郵便番号162-8711 東京都新宿区矢来町71
電話　編集部(03)3266-5411
読者係(03)3266-5111
印刷所……株式会社光邦
製本所……株式会社大進堂

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り下さい。
送料小社負担にてお取り替えいたします。
価格はカバーに表示してあります。

© Yo Yamanoguchi 2001, Printed in Japan
ISBN4-10-427002-4　C0093

われはフランソワ　目次

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

スペードのA　7
ハートのA　81
ダイヤのA　140
クラブのA　280

装画　中村太樹男
装幀　新潮社装幀室

われはフランソワ

スペードのA

おれはフランソワ　フランス人だ　こればっかりは気が重い
フランソワ・ヴィヨン

ルーアン　一四三一年

「おまえの生まれた年には、娘がひとり焼かれたんだよ。小さいフランソワ」
親父(おやじ)はそうしていつものお話をはじめる。それはくりかえし聞いて、あきあきしているはずなのに、なぜかおれを惹きつける。あまり話し上手じゃない親父はそのことを知っていて、父子ふたりのわびしい冬の食卓でまたしても同じお話をするんだが、親父の方もこの話が好きなのかもしれなかった。
「娘は、いつも王やら公やらの戦(いくさ)が絶えない、境目の小さな村で生まれたんだ」
小さいおれは、食卓に組んだ両手に顎をのっけ、ロウソクの火をみつめながらいう。
「さかいめって、なに？」
「となり村の人たちと喧嘩してるところのことさ」

「どうして女の子を焼いたの」
「ながいお話だよ、フランソワ」親父はきょとんとしたおれの目の前で指を振ってみせる。
「戦が百年、つづいているんだ」

昔むかし、エドワード三世とかいうイギリス王が、イギリスの王冠を載せた頭に、フランスのもかぶりたくなった。イギリス王は息子の黒太子――おれはこの名前を聞くといつも、漆黒の馬に乗った傲岸不遜の黒ずくめの騎士の姿を思い浮かべる――と一緒にフランスに攻め込み、あちこちでフランス軍をこなごなにした。それがもともとの火種なんだ。もちろんイギリス王も、息子の黒太子も、その敵たちも、いまはすべて土の下で仲良く平等に暮らしている。ところが土の上では百年後のいまになっても戦が止まない。みんながもとの火種なんか忘れてしまったのに、だらだら続いているんだよ。

娘の生まれたドン＝レミとかいう村のまわりの、紐みたいな土地は、運悪くフランス国王の直轄領だった。つまり、守ってくれる貴族は誰もいないのに、国王に忠誠だけは誓わなくてはならんという、損な土地柄だったのさ。

まわりはぜんぶ敵方だった。

イギリス軍、それと結託したブルゴーニュ派の軍、ときには味方であるはずのアルマニャック派の軍までもが、娘の生まれた村をかわりばんこに踏みにじって通った。家畜をくすね、教会で金目のものを漁り、農家や納屋に火を掛け、女たちを犯しながら通っていった。

傭兵というのはそういうものだ、フランソワ。あいつらは国を護る兵じゃない。目当ては金だけだ。やつらは、戦がたけなわの時には給金をもらっているから、かえって村には悪さをしない。困るのは戦と戦の間、中だるみの時期で、給金がなくなって食い詰めた傭兵たちは、そのまま隊を解

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

散せず、村から村を獲物を漁ってまわる。真冬の狼が群をなして家畜を狙うのと同じだ。隊を離れて散り散りになったら、恨み骨髄の百姓どもに一人ずつ囲まれ、大地に吸い込まれるように消えてしまうからな。

娘はいつもそういう光景を見ながら育った。そして十三になったとき、ある疑いを懐いたんだ。

――神さまはなぜこの土地と国を放っておられるの？　お見捨てになったの？

――そんなはずはないわ。地上のこのような愚昧と悲惨を、神さまがよしとするはずがないもの。ナザレの地に御子を遣わし、民をお救いになったときのように、きっと誰かを遣わし、この愚かな戦を終わらせ、フランスの土地をフランスに返してくださるに決まっているわ。

――でも誰を？

そのとき、芥子粒――いや、小麦粉の一粒よりも小さいなにかが、娘の頭に飛びこんだんだ。

親父は禿頭に人差し指をさっと突き立ててみせる。

娘はめまいがして歩いていた野原にうずくまった。聖歌の調べとともに大天使ミカエルのささやきが聞こえ、娘の小さな頭を占領した。混乱はしばらくしておさまった。娘は立ち上がって、別人になったように、大声で叫んだ。

「そうだ！　それがわたしに違いないわっ」

ここで親父は、きまって娘の声色を使う。子ども心にも大いに無気味なものだ。でも、つぎの瞬間には、肩を皮肉にすくめ、こう言うのだ。

「まったく、質の悪い考えを抱いたものだ」

娘は、自分がフランスを救うために神に選ばれた者だと信じるようになり、フランス王を補けて聖なる戦にでかけるのだと近所に触れ歩いた。

ところで当時、フランス王は誰で、そもそもフランスとは何か、そうはっきりとはしていなかっ

たんだ。いまでこそ生まれながらの王のようにふるまっているシャルル七世は、そのころまだ、つぎつぎに死んだ兄たちのお下がりでもらった王太子（ドーファン）の称号を名乗っていたし、イギリス王のヘンリー六世は、イギリスおよびフランスの王と名乗ってた。ブルゴーニュ派やわしらパリの市民も、それに与していたんだ。

娘の妄言にあわてた両親は、早いとこ誰か若い男を連れてきて嫁がせようとした。賢明と言うものだろうが、つかまった男こそいい面の皮だ。だが、その娘――ジャンヌは、正気かどうかはさておきともかく本気で、あんまり本気だから、まわりの連中もついついつり込まれてしまった。叔父の一人もその本気にほだされ、娘の住んでいた紐みたいな国王直轄領の守衛官に引き合わせてやろうと約束してしまった。

守衛官は親切にも、娘を正気に戻してやろうと二、三度平手打ちをくらわし、ドン＝レミ村に追い返した――効き目はまるでなし。

二度目に娘が押しかけてきたとき、守衛官は司祭を連れて行って、娘の憑き物をおとそうと試みた――これも効き目なし。

どうやら錬金術師のように、物事の成り立ちを一つ一つ確かめたがる質（たち）の男だったんだな。でも、悠長にあれこれ試みているうち、九ヶ月も居座られた娘の本気にあてられ、自分の方が酢に漬けた石みたいにやわらかくなってきた。ついに、シノンにいた王太子シャルルに、娘を紹介する親書を書いてしまったんだよ、フランソワ。

運命の神が娘に肩入れしだしたのはこのころからだ。

どうしたことか、王太子シャルルから、娘の謁見を許すという返書が届いた。

シャルルはイギリスとブルゴーニュ派相手に連戦連敗のありさまで、藁にもすがりたい気分だったか、それとも娘から守衛官に伝染した何かが、手紙を伝って太子にも伝染したんだろう。

娘はさっそく、守衛官がつけた数人の騎士を引き連れてシノン城に到着し、王太子シャルルに拝謁した。その席でシャルルは、天啓を受けたという噂の娘を試そうと、廷臣の一人と衣装をそっくり取り換えて待ち構えてた。いかにもあの男のやりそうなことだな。でも、娘は廷臣に変装したシャルルにつかつか歩み寄り、厳かに告げ知らせた。

「あなた様こそこのフランスを継ぐべき正統なお世継ぎでございます」

この一言にシャルルはすっかり参ってしまった。なにしろ、実の母親のイザボオ・ド・バヴィエールと仲違いして、先王シャルル六世の子ではないと宣告されてこのかた、本当だったらどうしようと、ずうっとくよくよ思い患っていたのだ。

おかしなことには、シャルル六世が三十年におよぶ長い狂疾の末に死んだことも同じくらい心配していた。自分もいずれ狂気の淵に沈むかもしれないとね。どっちかに決めれば心配事は一つで済むだろうに——母親の愛が足りないと妙な男ができるな。やつが疑り深いのもそのせいさ。でも、疑り深い男ほど、一度足下をすくわれると、案外欺されやすいものなんだ。

太子から兵馬を与えられ、娘はなんと将軍になった。もはや誰一人、娘の進路をわずかでも逸らしたり、思いついたことを止めさせられる者はいなかった。それどころか、まわりの者は、娘の危うい一本気を前に、つい現実的な救いの手を差し伸べてしまうのだった。ちょうど赤ん坊が這っていてベッドから落ちかかるとき思わず手を差し伸べてしまうように——。そのくらいあの娘の行動は命知らずだったんだ。

あまりにも強固な信念は、質の悪いペストみたいに猖獗をきわめることがあるんだよ、フランソワ。

娘の評判を聞いて集まった近在の有象無象も呑み込んで、娘の部隊は日ましにふくれ上った。娘はその手勢を率いて、イギリス軍に包囲されていたオルレアンに進軍し、わずか十日で街をみごと

解放した。続いて、パリをぐるりと回るようにトロワを、シャロンを開城させた。ランスでは王太子シャルルの戴冠式を演出した。王太子（ドーファン）は晴れてフランス王シャルル七世となったんだ。

だが、ジャンヌという娘の運もそこまでだった。そのころブルゴーニュ派が支配していたこのパリの街を攻めて果たさず、転戦を重ねるうち、ある籠城戦でブルゴーニュ派に捕らえられた。身柄はイギリス軍に渡され、ルーアンに護送された。

娘のおかげで国王となったシャルル七世は、イギリス人どもに復讐するといきまいていたが、結局指一本動かさなかった。ブルゴーニュ派と和解するほうが得策だと考えたんだ。青春の盛りにあるはずのこの国王には、青年らしい生き生きしたところがちっともなかった。まあ、母親に見捨てられ、父親は狂死、自分は子どものころブルゴーニュ派にパリを追い出されたきり連戦連敗なんだから、朗らかに人を信じろといっても無理だろうがな。もっとも、娘を見捨てたシャルルのこの陰湿な嗅覚は、あとでこの国を治めるのに大いに役に立った。

娘の異端審問はルーアンで開かれた。イギリスの依頼を受けて娘を糾問したのは、わしの母校、パリ大学神学部だった。教授たちは、偶像崇拝、魔女、分派的、背教者などなど、色とりどりの有罪宣告を下したものだ。

五月のある朝、娘はルーアンの広場で焼かれることになった。

いまや娘は敵方からも畏れられていた。太陽を見続けられないように、あまりにも剛直な信仰、逞しいほどの信念には、眼がくらんでしまうんだよ。誰も娘と眼も合わさず、言葉も交わさず、黙々と焼く支度をした。娘を抱き上げて鄭重に広場の壇上に運び、柱にくくりつけ、足下に上等の薪束を山と積み上げて、火がつけられた。

長く続く悲鳴と聴こえたのは、神と天使と聖霊への祈りだった。娘の服が残らず燃え落ちたときには、焼いた連中は一旦火を消して、娘が女の身体を持った単なる女だと確かめずにいられなかっ

た。
娘がすっかり灰になるには夕方までかかった。
それを一日中見ていた敵方の連中は、すべてが済んでから、急に自分たちの行いが怖ろしくなった。
ある兵は、娘が息絶えるとき、口から白い鳩が飛び立ったと言いだした。
「おれたちは聖女を焼いちまった！　もうおしまいだ！」そう叫びながら街中を走り回る兵もいた。
娘を焼いた遺灰を見るのさえ怖ろしく、台上の灰をあわててかき集めてルーアンの橋の上から撒いた。風に散らされた灰は大地を覆い、セーヌ河に運ばれて大海と一つになったのさ、フランソワ。

娘の話を聞いた夜、寝床の中で、おれは焼かれた娘のことを考える。起きてるんだか寝てるんだかわからない不思議なあたりをさまよいながら。
娘の灰を撒いて、それで敵方の連中は怖くなくなったろうか？——だめだろう。空も、海も、自分の踏んでいる地面までが怖くなったに違いない。
それに、小さいおれには《娘を焼く》という言葉がなんだか像をむすばない。想像の右手に美しい裸身の娘をのせ、左手には香ばしく焼けた串焼き肉をのせ、両方の手のひらをあわせてみる——何も起こらない。つぎに、右手に「娘」という言葉を、左手に「焼く」をのせて、両手をぐるぐる振り回す。だんだん夢中になり、「娘を焼く——娘・を・焼く」と唱えながら、堅くつぶったまぶたの裏にもやもやと集まってくる、光の渦のような像を見ようと、必死にそうしていると——。
かちり、と偶然ぶつかった火打ち石の火花のように暗闇の一点が眩く光り、あまりにも明るい、鮮やかな映像（ヴィジョン）が、天井の一角からおれめがけて雪崩れ落ちてくる。
おれは見る。

火と煙で織った薄物が丸みをおびた白い身体を包み込むのを。
美しい顔が火の舌に舐められ皮膚から噴き出した脂に火がついて髑髏の形に燃え上がるのを。
膨れ上がった腹がはじけ煮えたぎる臓物がおそろしい臭気とともに雪崩れ落ちるのを。
娘の手足であったものから焦げ爛れた肉がつぎつぎとはがれ落ちるのを。

その光景のあまりの鮮烈さ美しさに、おれは暗闇を睨んだまま、椎の実のようなキンタマをすくませて寝台にはりつき、一睡もできなくなる。
だけどつぎの夜にもそれはやめられず、よせばいいのにおれは「娘を焼く——娘・を・焼く」と唱えながら眠りにつくのだ。
ずいぶん後になって、おれは娘のことを詩に書きつけた。

あの勇敢なロレーヌの娘
ルーアンでイギリス軍に焼かれたジャンヌ
みなどこに　マリア様　どこにいるのです
それにしても　どこにあるんです　去年の雪は

パリ　一四三二年

ジャンヌという娘が焼かれたのはおれが生まれた年のことだから、覚えているはずもない。親父だってその娘を見たわけじゃない。でも、親父から繰り返し聞かされるうち、自分で見たような気

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com